

VI 提言

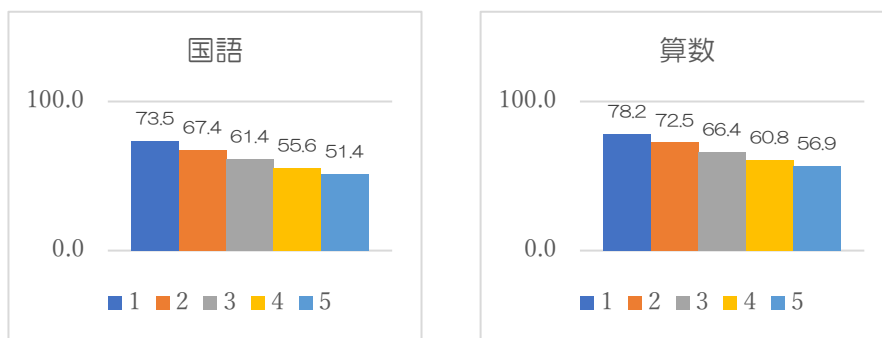
1 質問紙調査の分析から

質問紙と学力のクロス分析

【小学校】

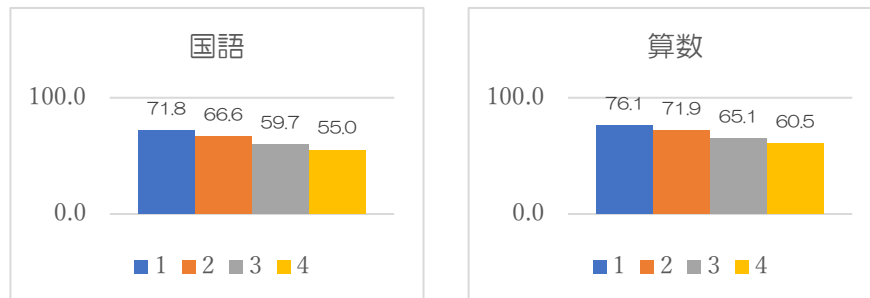
○以下と回答している児童ほど、国語、算数ともに正答率が高い傾向が見られた。

Q32：5年生までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していた。



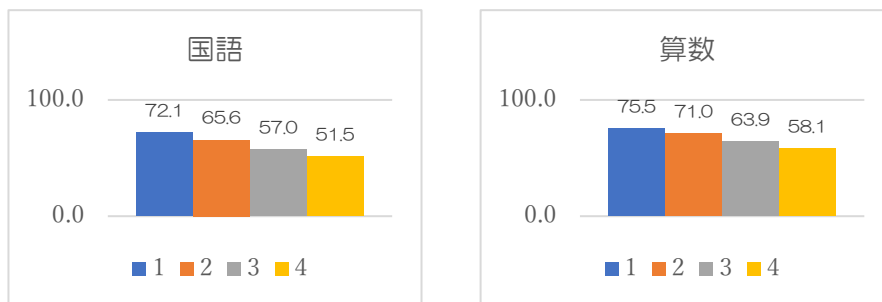
1 発表していた/2 どちらかといえば発表していた/3 どちらかといえば発表していなかった
4 発表していなかった/5 考えを発表する機会はなかった

Q39：総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる。



1 当てはまる/2 どちらかといえば、当てはまる/3 どちらかといえば、当てはまらない/4 当てはまらない

Q47：国語の授業では、言葉の特徴や使い方についての知識を理解したり使ったりしている。

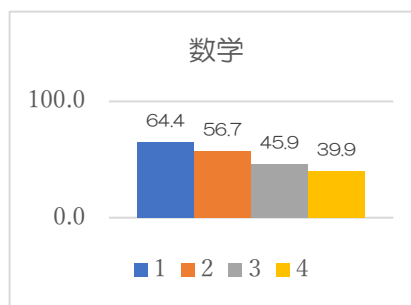
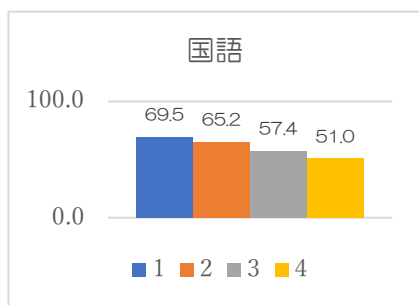


1 当てはまる/2 どちらかといえば、当てはまる/3 どちらかといえば、当てはまらない/4 当てはまらない

【中学校】

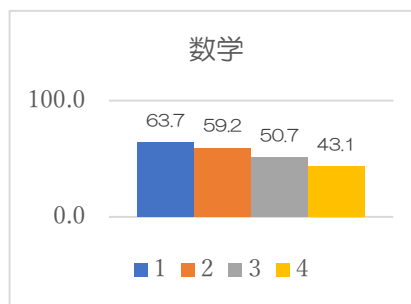
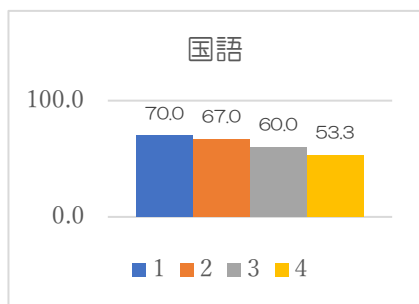
○以下と回答している生徒ほど、国語、数学ともに正答率が高い傾向が見られた。

Q33：1，2年生のときに受けた授業では，課題の解決に向けて，自分で考え，自分から取り組んでいた。



1 当てはまる/2 どちらかといえば、当てはまる/3 どちらかといえば、当てはまらない/4 当てはまらない

Q62：1，2年生のときに受けた英語の授業では，英語で話したり書いたりして，自分自身の考えや気持ちを伝え合うことができていた。

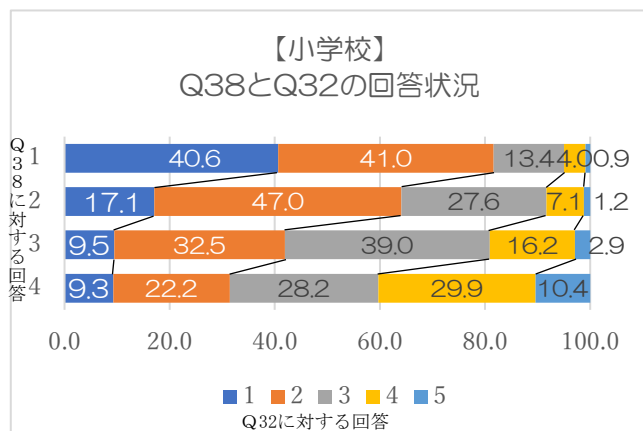


1 当てはまる/2 どちらかといえば、当てはまる/3 どちらかといえば、当てはまらない/4 当てはまらない

また、上記5つの質問項目の全てと相関がみられる質問項目として、「Q38：学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」があった。

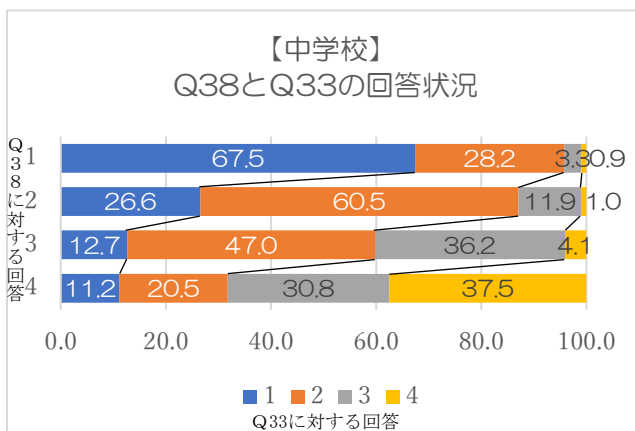
(次頁提言1参照)

例) Q38とQ32 (小学校)、Q38とQ33 (中学校) の回答状況



【グラフの見方例】

Q38で「1 当てはまる」と回答した児童のうち、40.6%は、Q32でも「1」と回答している。



【グラフの見方例】

Q38で「1 当てはまる」と回答した生徒のうち、67.5%は、Q38でも「1」と回答している。

2 令和3年度全国学力・学習状況調査

調査結果を踏まえた学力向上7つの提言

提言1 単元などの内容や時間のまとまりを意識した指導の充実

1 単位時間の授業は大切です。しかし、そこでの学びが児童生徒の中でつながらなければ、学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚することができません。質問項目 38「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」の項目は、学力と相関の高い他の質問項目とも高い相関があります。学習した内容について自ら振り返り、次の学習に生かしていくためには、教員自身1単位時間の授業計画だけでなく、単元などの内容や時間のまとまりの中で育成したい資質・能力を明確にした上で指導計画を立て、児童生徒の学びをつなげていくこと、変容を自覚させていくことが必要です。それはまた、教科の「見方・考え方」を働かせることにも結び付けはらずです。これらの改善が、児童生徒に教科を学ぶ意義を実感させ、「学びに向かう力」を育むことにもつながります。

提言2 指導と評価の一体化の充実

「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、どう評価したらいいのかという方法論が話の中心になっていないでしょうか。育成を目指す児童生徒像は明確でしょうか。学習評価は、教師が自らの指導のねらいに応じて授業での児童生徒の学びを振り返り、学習や指導の改善に生かしていくこと、そして、その指導のもとで児童生徒が学習したことの意義や価値を実感できるようにするために行うものです。育成を目指す児童生徒像をしっかりとイメージし、現時点での児童生徒を冷静に分析し、指導を通して児童生徒がどう伸びたのか、どう変容したのかを見取り、一人一人にその成果を返していくとともに、教員が自らの指導を改善していくという認識が重要です。

提言3 認知能力と非認知能力の育成

認知能力と非認知能力は一体的に育成されるべきものです。非認知能力の定義は諸説あるので、その定義について議論することよりも、各校の教育目標と照らし合わせ、育成を目指す児童生徒像に則って「こういう力を伸ばそう」と決めることが必要です。そして、校内研修等を通じて全教職員で共通理解を行い、学校の教育活動全体を通して育成を目指していくことが大切です。

提言4 すべての教科における言語活動の充実

質問項目 32 で「自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していた」、質問項目 62 で「英語の授業では、英語で話したり書いたりして、自分自身の考えや気持ちを伝え合うことができていた」と回答していた児童生徒は、国語、算数・数学どちらの教科とも平均正答率が高い傾向がありました。グループで話し合う、考えたことを文章に書く、他人にうまく伝わるよう考えながら説明する等について、各教科でどういう工夫ができるかを考えることが、どの教科にもプラスの効果を与えていると示唆されます。このとき、担任や各教科担当だけで考えるのではなく、学校全体で方針を持ち、全教職員で共通理解した上で指導することが大切です。

提言5 学んだことを生かし、自ら課題を設定し解決する場面の充実

質問項目 39 で「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいる」、質問項目 33 で「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた。」も各教科の平均正答率と相関がみられます。自ら課題を設定し、解決していく課題解決型学習を通して各教科で学んだことを実際に使いこなし、そこで得た学ぶ力を再び教科の学びへと生かしていく機会を充実させることが大切です。

提言6 生徒指導の機能を強化した学級経営

生徒指導の機能(自己決定の場・自己の存在感・共感的な人間関係)を活かした学級経営が大切であることは言うまでもありません。教員の児童生徒への適切な言葉かけによって、学級は落ち着きます。児童生徒一人一人が、学級が楽しい、安心できるという感覚を持つ中で、他者の意見を聞いて自らの考えを深めたり、相手に伝わるように工夫しながら発表をしたりといった学習活動を行っていくことが大切です。

提言7 実践的な校内研修、指導の振り返りと改善の充実

模擬授業や事例研究などの実践的な校内研修を行うこと、また、授業研究会を含む校内研修の質の向上を目指し、学校としての「授業力」を組織的に向上させることが必要です。「この授業は単元においてどういった位置付けか」、「この授業では児童生徒にどういう力を付けさせるのか」、「力が付いたかどうかをどうやって見取るのか」を明確にして授業を構想し、できているかどうかを全教職員で検証し改善方法について検討する、その繰り返しが学校としての授業力向上に結び付きます。「得意な教科、専門の教科でないから分からない」ではなく、学校として何を大切にしているのかを押さえ、「どういう視点で授業を見るのか」について共有することも必要です。

ここでは授業研究会を例に挙げましたが、学校の教育活動について、教員の感覚と客観的データの両輪から児童生徒の伸びと変容を把握し、指導を振り返り、改善していく学校文化を醸成していくことが重要です。